

は え ち く
八 重 地 区 遺 跡

前畠第1遺跡・前畠第2遺跡・権現谷第1遺跡・
権現谷第2遺跡・砂田遺跡・宮田遺跡

県営農地保全整備事業八重地区に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1994

宮崎県宮崎郡田野町教育委員会

例　　言

1. 本書は、県営農地保全整備事業八重地区に伴い田野町教育委員会が実施した、八重地区遺跡発掘調査の報告書である。

2. 各遺跡の調査は、下記のとおり実施した。

昭和63年度	権現谷第1遺跡（八重地区遺跡B C D地区）・権現谷第2遺跡（八重地区遺跡A地区）・宮田遺跡（八重地区遺跡E地区）
平成元年度	前畠第1遺跡
平成2年度	前畠第2遺跡・砂田遺跡
平成5年度	八重地区遺跡発掘調査報告書作成

3. 調査は、次の体制で実施した。

調査主体	田野町教育委員会 教育長	種子田榮幸（昭和63年度）
		鍋倉 政信（平成元年度～）
社会教育課長	川口 昭七（昭和63年度）	
	北村 光雄（平成元年度～）	
	前田 久育（平成5年度）	
社会教育課長補佐兼係長		
	新坂 政光（昭和63年度）	
	長友 啓泰（平成5年度～）	
社会教育係長	長友 啓泰（平成元年度～4年度）	
調査事務担当	同 主任主事	後藤 哲男（昭和63年度）
	主査	横間 靖子（平成元年度～2年度）
	主査	長友カツ子（平成3年度～）
発掘調査担当		森田 浩史（昭和63年度～）
	県文化課主事	長友 郁子（平成2年度）
調査指導		宮崎県教育庁文化課

4. 出土遺物・図面等の整理にあたっては、次の方々の補助を得た。

(昭和63年度)	(平成元年度)
(平成2年度)	(平成2年度～5年度)

(平成 2 年度) (平成 5 年度)

5. 本書の執筆は前畠第 2 遺跡を長友郁子が、他を森田浩史が担当した。
6. 現地の調査にあたっては、田野町並びに山ノ口町在住の方々の参加を得た。
7. 本書に用いた方位は磁北、標高は海拔絶対高である。また、記号については下記のとおりである。
集石造構 (S I) 土坑 (S C) 溝 (S D) 壺穴住居 (S A)
8. 出土遺物は田野町教育委員会で保管している。
9. 現地調査及び室内調査にあたっては、下記の方々にご指導ご協力を賜った。
・岩永哲夫氏（宮崎県文化課）・面高哲郎氏（宮崎県文化課）・水野正好氏（現奈良大学学長）・新東晃一氏（鹿児島県文化課）・島津義昭氏（熊本県文化課）・清田純一氏（城南町教育委員会）・宍戸章氏（当時宮崎県文化課）・有本雅巳氏・有村玄洋氏（宮崎県総合農業試験場）・桑畠光博氏（都城市文化課）

総 目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1	
(挿図) 第1図 町内遺跡分布図	3	
第2図 八重地区遺跡周辺地形図	4	
第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境	5	
第Ⅲ章 前畠第1遺跡	7	
第1節 調査の概要	7	
第2節 検出遺構	8	
第3節 出土遺物	15	
第4節 まとめ	28	
(挿図) 第3図 調査区周辺地形図		7
第4図 C区遺構分布図		10
第5図 S I - 0 1 ~ 0 6 実測図		11
第6図 S I - 0 7 ~ 1 3 実測図		12
第7図 S I - 1 4 ~ 1 9 実測図		13
第8図 S C - 2 0 ~ 2 1 実測図		14
第9~15図		
出土遺物実測図 (縄文土器)		17
第16~19図		
出土遺物実測図 (石器)		24
(写真) A区遺物出土状況		29
B区全景		30
C区東側全景		31
C区西側遺構検出状況		32
S I - 0 1 ~ 0 4 検出状況		34
S I - 0 2 ~ 0 4 検出状況		35
S I - 0 5 ~ 0 7 検出状況		36
S I - 0 8 ~ 1 0 検出状況		37
S I - 1 1 ~ 1 3 検出状況		38

SC-14・15検出状況ほか	39
SC-16・17・19検出状況	40
SC-20~22検出状況	41
出土遺物（縄文土器）	42
出土遺物（縄文土器・石器）	47
出土遺物（石器）	48

第IV章 前畠第2遺跡

第1節 調査の概要	49
第2節 検出遺物	49
第3節 出土遺物	53
第4節 まとめ	90

(挿図) 第20図 調査区周辺地形図	50
第21図 A~C区土層断面図	51
第22図 A区遺構分布図	53
第23図 B区遺構分布図	54
第24図 C区遺構分布図	55
第25図 D区遺構分布図	56
第26図 A区遺構実測図 (SI-01~03)	57
第27図 B~D区遺構実測図 (SI-04~08)	58
第28図 D区遺構実測図 (SI-09~12)	59
第29図 B区遺構実測図 (SI-13・14・16~19)	60
第30図 B・C区遺構実測図 (SC-15・21~23・25)	61
第31図 C・D区遺構実測図 (SC-20~24・26~28)	62
第32図 D区遺構実測図 (SD-29~31)	63
第33図 D区 (SD-29) 断面実測図	66
第34図 D区 (SD-30・31) 断面実測図	67
第35図 A区遺物分布図	68
第36図 B区遺物分布図	69
第37図 C区遺物分布図	70
第38図 D区遺物分布図	71

第39~40図	
出土遺物実測図（縄文土器）	72
第49図 出土遺物実測図（中世土器）	82
第50~55図	
出土遺物実測図（石器）	83
(表) 表1~4 土器観察表	92
表5 石器計測表	97
(写真) 前畠遺跡全景・B区全景	99
D区全景	100
A区北壁・B区北壁・S I - 0 1	101
S I - 0 2 · 0 3 · 0 4	102
S I - 0 5 · 0 6 · 0 7	103
S I - 0 8 · 0 9 · 1 0	104
S I - 1 1 · 1 2 · S C - 1 6	105
S I - 1 4 · 1 7 · 1 8	106
S I - 1 5 · 1 9 · 2 1	107
S C - 2 0 · 2 2 · 2 3	108
S C - 2 4 · 2 6 · 2 7	109
S C - 2 8 · S D - 2 9 · 3 0	110
S D - 3 0 · 3 1	111
出土遺物（縄文土器）	112~120
出土遺物（縄文土器・中世土器）	121
出土遺物（石器）	122~124
第V章 権現谷第1遺跡	125
第1節 調査の結果	125
(挿図) 第56図 遺構分布図	127
第57図 調査区周辺地形図	129
第58図 遺構実測図（S A - 0 1 · S C - 0 8 · 1 0）	130
第59図 遺構実測図（S A - 0 3 · 0 4 · S C - 0 6 · 0 7）	131
第60図 遺構実測図（S C - 0 9 · 1 1 ~ 1 3）	132

第61図 遺物実測図（縄文土器・石器）	132
第62図 遺物実測図（縄文土器・弥生土器・石器）	133
(写真) SA-03検出状況	134
SA-02・04検出状況	135
D区遺構検出状況	136
SA-02・04検出状況	137
SA-03・SC-05・SA-04	138
SA-02遺物出土状況・完掘状況	139
SA-01・SC-08・10	140
出土遺物（縄文土器・石器）	141
出土遺物（弥生土器）	142
 第VI章 権現谷第2遺跡	143
第1節 調査の結果	143
第2節 まとめ	143
 (挿図) 第63図 調査区周辺地形図	144
第64図 遺構分布図	144
第65図 遺構実測図（SC-01～08）	145
第66図 遺構実測図（SC-09・10）	146
第67図 遺物実測図（縄文土器）	
 (写真) 遺構検出状況	147・148
遺構検出状況・SC-06検出状況	149
SC-05検出状況・出土遺物（縄文土器）	150
 第VII章 宮田遺跡	151
第1節 調査の結果	151
 (挿図) 第68図 遺構分布図	152
第69図 遺構実測図（SI-01～03・SC-04～07）	153
第70図 遺構実測図（SC-08～12）	154
第71図 遺物実測図（縄文土器）	155
第72図 遺物実測図（縄文土器・石器）	156

第73図 遺物実測図（石器）	157
（写真）遺構検出状況・S I - 0 1 検出状況	158
出土遺物（縄文土器）	159
出土遺物（縄文土器・石器）	160
第Ⅱ章 砂田遺跡	161
第1節 調査の概要	161
第2節 検出遺構	162
第3節 出土遺物	166
第4節まとめ	173
（挿図）第74図 調査区周辺地形図	161
第75図 遺構分布図	163
第76図 遺物分布図	169
第77図 遺物分布図	170
第78図 遺物分布図	171
第80図 遺構実測図（S I - 0 1 ~ 0 4）	174
第81図 遺構実測図（S I - 0 5 ~ 0 7 ・ S C - 0 8 ・ 0 9）	175
第82図 遺構実測図（S C - 1 0 ~ 1 3）	176
第83図 遺構実測図（S C - 1 4 ~ 1 6）	177
第84図 遺構実測図（S C - 1 7 ・ 1 8）	178
第85図 遺構実測図（S C - 1 9 ~ 2 3）	179
第86図 遺構実測図（S C - 2 4 ~ 2 7）	180
第86~91図 遺物実測図（縄文土器）	181
第92~94図 遺物実測図（石器）	187
（写真）調査区域全景	190
A区調査状況	191
B区調査状況	192
C区調査状況	193
D区調査状況	194

E区調査状況	195
F区調査状況	196
SI-01検出状況・完掘状況	197
SI-03・04検出状況・完掘状況	198
SI-02・05・SC-08	199
SI-09・10・12	200
SI-13・17・18	201
SI-14・15・20	202
SI-16・24・21	203
SI-19・22・27	204
出土遺物（縄文土器）	205～208
出土遺物（石器）	209・210

第Ⅰ章 調査に至る経緯

農業が主産業であった田野町では、以前から農地の改良整備等が盛んに行われてきたがそれと共に埋蔵文化財の破壊消滅が危惧されはじめたため、昭和58年度から実施した前平地区県営農地保全整備事業に伴う発掘調査を契機として、埋蔵文化財の保存調査に積極的に取り組んできた。ここに報告する八重地区遺跡発掘調査を実施するまでには、県・町の各課、関係者各位の並々ならぬご理解とご尽力があったことを、まず記しておきたい。

〔昭和63年度〕権現谷第1・権現谷第2遺跡・宮田遺跡

同年度から県営農地保全整備事業八重地区の工事が着工予定となったため、昭和63年1月に県文化課が同事業予定区内における埋蔵文化財の分布調査を実施した結果、広範囲に遺跡が所在することを確認した。その結果に基づき1月7日に八重地区土地改良区と埋蔵文化財の保存について協議し、以後も7月まで宮崎県中部農林振興局と遺跡の保存について協議を続けたが、工事施行上、現状保存が不可能な区域について、発掘調査による記録保存の措置を取ることで合意した。発掘調査は町教育委員会が主体となり、同年8月29日に着手した。

〔平成元年度〕前畠第1遺跡

昭和64年1月19日に平成元年度工区について県中部農林振興局、八重地区土地改良区、町土地改良区、町教育委員会との間で第1回目の協議を行った。しかし、この段階で予定区内の埋蔵文化財の分布状況を把握していなかったので、試掘調査によるデータを検討した上で再度協議することとなった。平成元年1月31日から県文化課で試掘調査を実施し、予定工区のほぼ全域が遺跡であることを確認した。その結果に基づき、埋蔵文化財の保存について県文化課、県中部農林振興局、県土地改良連合会、町教育委員会の間で協議し、前畠地区の一部を実施工区とし、他の工区は次年度以降に実施することで合意した。埋蔵文化財については工事施行上、現状保存が不可能な区域について、発掘調査による記録保存の措置を取ることで合意した。発掘調査は町教育委員会が主体となり、平成元年4月17日に着手した。

〔平成2年度〕前畠第2遺跡・砂田遺跡

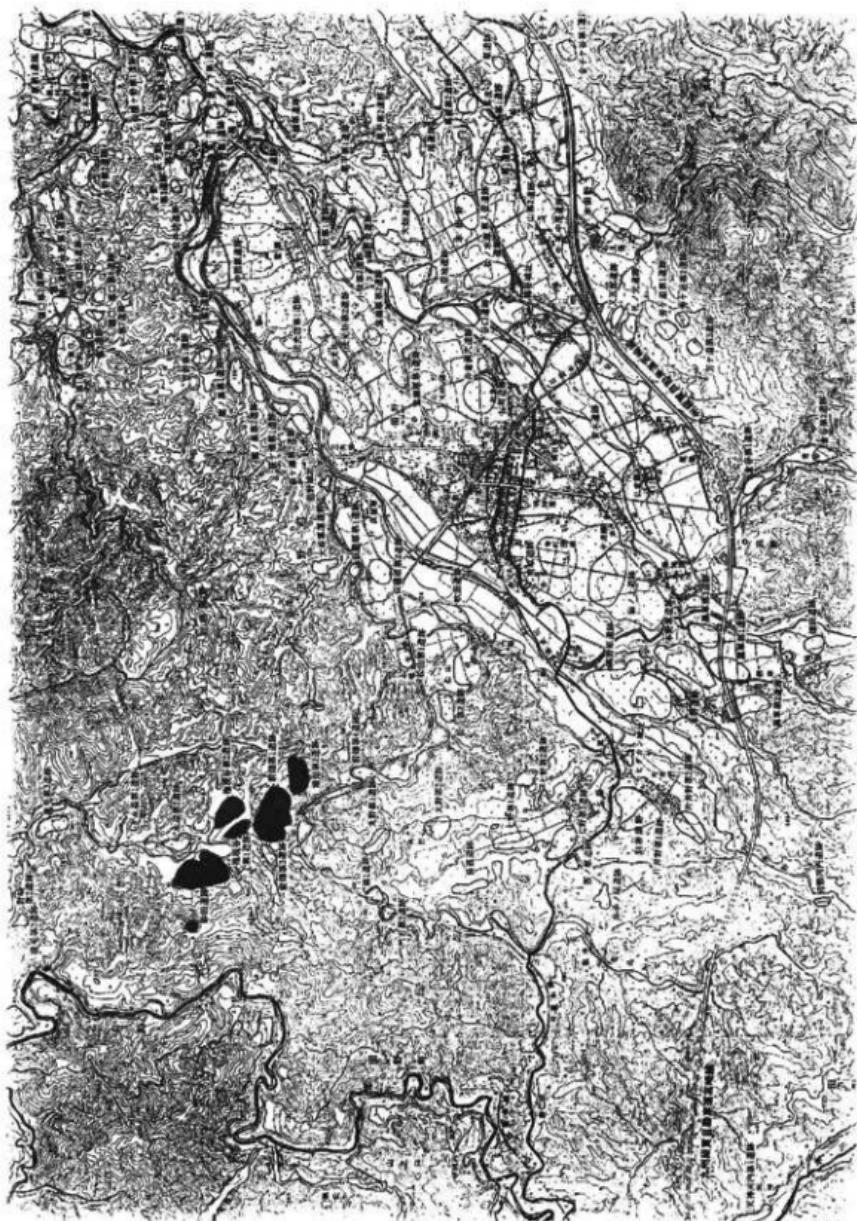
同年度は前畠地区と砂田地区の広大な範囲が予定工区となった。そのため、早急に埋蔵文化財の分布状況を把握する必要が生じたため、平成2年2月に県文化課で試掘調査を実施した。その結果、両地区ともにほぼ全域が遺跡であることを確認した。同年4月20日に実行区域と埋蔵文化財の保存について県文化課、県中部農林振興局、町教育委員会の間で

協議し、その後も再三にわたり協議したが、予定工区を縮小することは困難な事情もあり当初予定の2地区を対象に、工事施行上、現状保存が不可能な区域について、発掘調査による記録保存の措置を取ることで合意した。

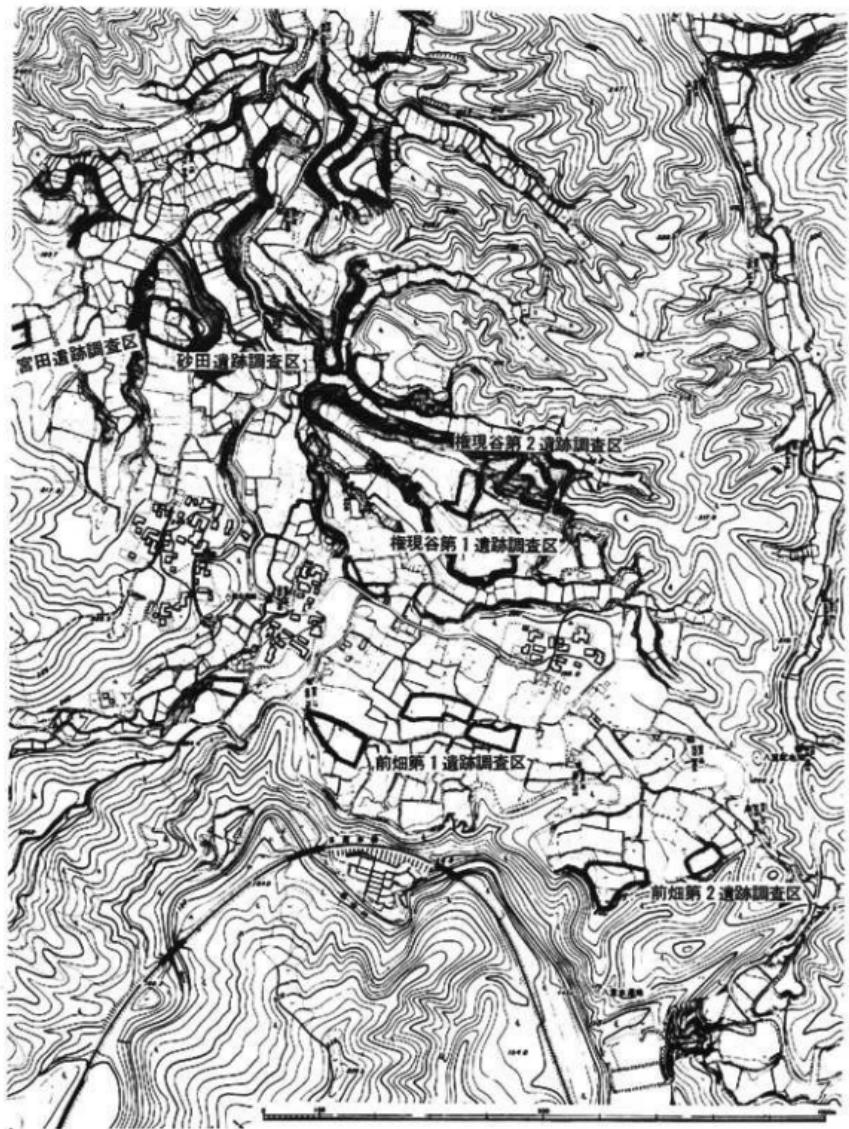
しかし、発掘調査予定面積に相反して調査員や調査期間等の体制が不十分であったため県文化課に調査員の派遣を依頼した。その結果、砂田地区を町教育委員会の森田が、前畠地区を県文化課の長友郁子が分担して実施することとなった。発掘調査は町教育委員会が主体となり、前畠地区は同年8月2日に、砂田地区は同年9月5日に着手した。同年9月以降は台風の襲来に伴い、再三にわたり農地、道路、河川、家屋その他が多大な災害を受けた。発掘調査も例外ではなく、前畠遺跡の調査予定地が直径約10数メートルにわたり陥没（消滅）、砂田遺跡の調査区境界が地滑りを起こすなど、調査の成果や進捗に影響を及ぼした。

〔付 記〕

上記調査にあたり、県中部農林振興局、県土地改良連合会、八重地区土地改良区、県文化課、並びに地権者の皆様のご理解とご協力を賜りましたことに対し、ここに記して感謝申し上げる次第であります。



第1図 町内遺跡分布図



第2図 八重地区遺跡周辺地形図

第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

田野町は、宮崎市の西方約20kmの地点を中心とする田野盆地と、それを取り囲む鰐塚山系ほかの山々からなり、1市（宮崎市）5町（清武町・高岡町・山ノ口町・三股町・北郷町）と接する。主な産業は、豊かな自然と肥沃な土壤を利用した農林業であったが、近年は高速道路、国道、県道等の整備によって交通の要衝の地となり、宮崎市や都城市からも近隣であるため、住宅地としてのニーズも高まり、また工業団地の整備による企業誘致にも積極的に取り組むなど、徐々にその姿を変えつつある。

八重地区は町の中心部から北西に約3kmの松山川左岸にある台地を中心に位置し、台地上では主に畑作が、谷地形部分においては稲作が営まれている。台地は四万十層群を基盤として主にシラス台地で構成されており、AT火山灰や赤ホヤ火山灰の堆積層が明瞭な状態で見られる。町内では化石が各地で採集されることで知られているが、八重地区も例外では無く、前畠第2遺跡の調査区付近においては貝類の化石が多量に発見された。

八重地区において最初に遺跡が発見されたのは、前畠第4遺跡（旧名称：前畠遺跡）で西都市在住の大野寅夫氏により表探された縄文時代早期の貝殻条痕文土器がきっかけとなつた。これは、当時宮崎県総合博物館の学芸員であった茂山護氏によって復元され、現在も同博物館に所蔵されている。その後も地区内の各所で土器等が発見されていたが、今回報告する八重地区遺跡発掘調査や、平成元年度に実施した町内遺跡詳細分布調査の実施により、台地平坦部のほぼ全域にわたり埋蔵文化財の包蔵地であることが確認された。平成5年4月現在で次の10遺跡に至る。

前畠第1遺跡 前畠第2遺跡 前畠第3遺跡 前畠第4遺跡 水迫第1遺跡
水迫第2遺跡 宮田遺跡 権現谷第1遺跡 権現谷第2遺跡 砂田遺跡

旧石器時代は現在のところ明確な資料を確認していないが、縄文時代草創期は砂田遺跡の調査で爪形文土器が出土したほか、前畠第2遺跡においても発見されている。早期は今回報告する6遺跡を含め、全遺跡で確認されている。前期は権現谷第1遺跡で土坑に伴う土器片が出土している。中期と晩期については未だ発見されていないが、後期は土坑に伴う土器片が出土している。弥生時代は、権現谷第1遺跡で後期の住居址が2件確認されたのみである。これ以降は極めて希薄であり、権現谷第2遺跡で布痕土器が表探されたほか前畠第2遺跡で時期不詳のU字状の溝と箱矢研堀の溝が確認されたのみであるが、歴史の古い集落であるとの伝承もあり、いずれ資料が増加するものと期待される。

以上のように八重地区の遺跡は殆どが縄文時代早期で占められる。これは耕作等による削平や擾乱が多少起因しているのであろうが、当地の歴史的環境を考える上でたいへん興

味深い資料である。

その他、周辺の遺跡としては、松山川により形成された深い谷を隔てた七野地区に所在する丸野第2遺跡・長藪遺跡などの遺跡群がある。丸野第2遺跡は縄文時代早期から後期と弥生時代後期の複合遺跡であり、弥生時代後期については竪穴住居跡が検出された。長藪遺跡は旧石器時代の遺物と縄文時代早・前期の遺構遺物が出土した。八重地区北方の野崎地区にも時代等は明確でないが、多数の遺跡が発見されている。

〔参考文献〕

- 「長藪遺跡概要」 田野町文化財調査報告書第7集 田野町教育委員会 1989
「八重地区遺跡～県営農地保全整備事業八重地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概要～」
　　田野町文化財調査報告書第7集 田野町教育委員会 1989
「前畠第1遺跡～県営農地保全整備事業八重地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概要～」
　　田野町文化財調査報告書第9集 田野町教育委員会 1990
「田野町遺跡詳細分布調査報告書」
　　田野町文化財調査報告書第10集 田野町教育委員会 1990
「丸野第2遺跡」 田野町文化財調査報告書第11集 田野町教育委員会 1990
「八重地区遺跡～県営農地保全整備事業八重地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概要～」
　　田野町文化財調査報告書第12集 田野町教育委員会 1991
「田野町史～上巻～」 田野町史編纂委員会編 田野町 1983

第三章 前畠第1遺跡

第1節 調査の概要

八重地区集落中心部から東側の台地上に位置する。事業施工前の現地形は、北側のややフラットな部分からなだらかな斜面と急な段差をもちながら南側へ下る。対面にある七野地区の台地とは、松山川によって寸断されている。シラス台地であるためか、各所で陥没した痕跡が見られた。

調査区は地点及び調査をすすめる都合上、A・B・Cの3地区を設定し、調査対象面積はA区が4,000m²、B区が3,000m²、C区が2,000m²の全体で約9,000m²に至った。

層位は概ね上層から耕作土・黒色土・赤ホヤ・黒褐色土（カシワバン）・褐色土1・褐色土2・黄褐色土を基本とする。遺物はA・B区の黒褐色土・褐色土1・褐色土2から縄文時代早期の土器・石器が出土した。遺構はC区の褐色土1・褐色土2の掘り下げ段階及び黄褐色土上面精査時において集石遺構・土坑・ピット状遺構を検出した。



第3図 調査区周辺地形図

第2節 検出遺構

集石遺構が13基、土坑が8基と多数のピットが確認された。集石遺構と土坑はいずれも赤ホヤ堆積層よりも下層において確認されていることから、縄文時代早期のものと推定される。ピットについては用途・時期等を明確にするまでには至らなかった。

○集石遺構

全てC区で検出された。これらは明瞭な土坑を伴うもの(SI-03・06・09・14)ごく浅い輪郭の不明瞭な土坑を伴うもの(SI-05・08)と土坑を伴わないもの(SI-01・02・07・10・12)に大まかに分類される。いずれも疊は熱を受けていたためか、赤変している。

[SI-01]

約100cm×80cmの範囲に疊が疎らに分布する。土坑を伴わない。

[SI-02]

約150cm×175cmの範囲に疊が疎らに分布する。土坑を伴わない。

[SI-03]

約150cm×170cmの範囲に疊が密に分布し、深さ15cmの土坑を伴う。

[SI-04]

約160cm×170cmの範囲に疊が密に分布し、深さ15cmの土坑を伴う。

[SI-05]

約60cm×70cmの範囲に疊が疎らに分布する。土坑を伴わない。中心部の疊はやや大ぶりのものがある。チャートのチップが4点、黒曜石のチップが3点出土した。

[SI-06]

約40cm×50cmの範囲に疊が分布し、深さ15cmの土坑を伴う。中心部の疊はやや大ぶりのもので、石皿もしくは磨石を転用したものとみられる。

[SI-07]

約40cm×55cmの範囲に疊が分布する。土坑を伴わない。中心部の疊はやや大ぶりである

[SI-08]

約120cm×140cmの範囲に疊が密に分布し、深さ15cmの土坑を伴う。精査の段階で平格式土器(?)が出土した。

[SI-09]

約50cm×55cmの範囲に疊が分布し、深さ10cmの土坑を伴う。中心部にはやや大ぶりの疊がある。

[SI-10]

約80cm×80cmの範囲に疎が分布し、土坑を伴わない。

[SI-11]

疎が疎らに分布し、土坑を伴わない。

[SI-12]

疎が疎らに分布し、浅い土坑を伴う。疎が取り出されたような痕跡が見られる。無文の土器片が2点出土した。

[SI-13]

約80cm×90cmの範囲に疎が分布し、深さ20cmの土坑を伴う。中心部に疎が取り出されたような痕跡が見られる。

○土 坑

いずれもC区で検出された。(SC-16・20)は長方形であるが、他は比較的不整形なものである。

[SC-14]

80cm×80cm、深さ132cmの方形に近いプランを呈する

[SC-15]

120cm×120cm、深さ100cmの不整形なプランを呈する

[SC-16]

61cm×126cm、深さ120cmのやや崩れた長方形を呈する

[SC-17]

88cm×99cm、深さ48cmの楕円形に近いプランを呈する。条痕文等の土器片が2点とチャートの剥片・チップが5点、黒曜石の剥片・チップが2点出土した。

[SC-18]

102cm×141cm、深さ21cmの不整形なプランを呈する。無文土器片が1点出土した。

[SC-19]

103cm×114cm、深さ15cmの不整形なプランを呈する

[SC-20]

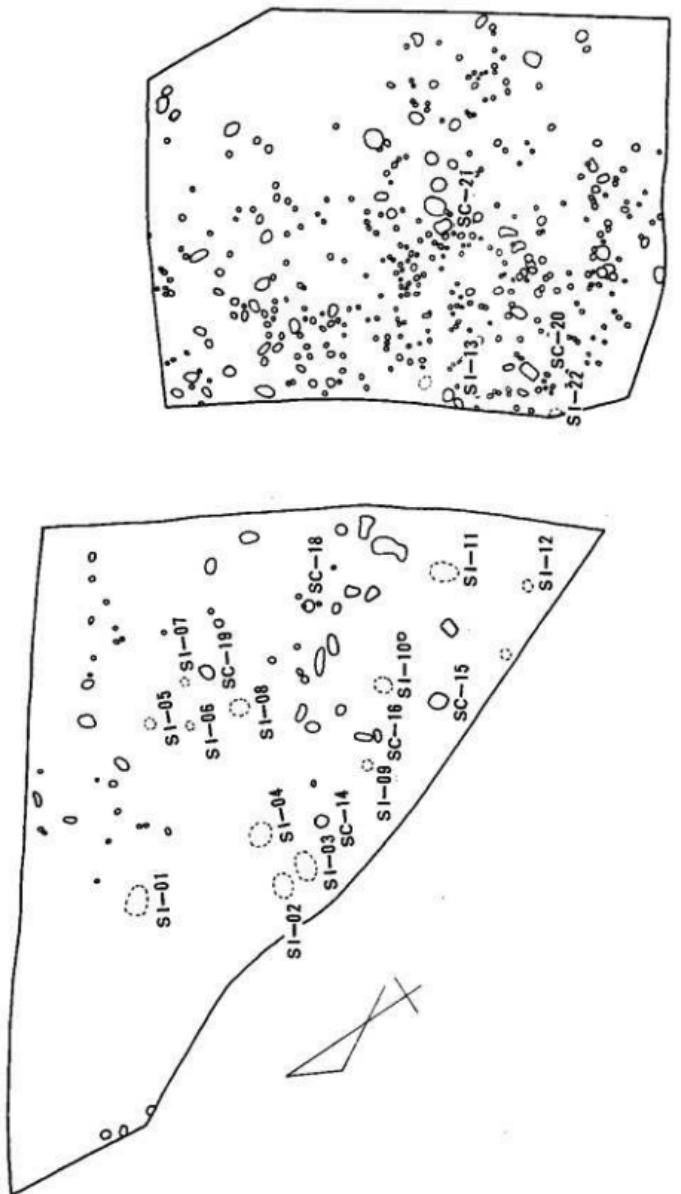
75cm×130cm、深さ141cmの長方形を呈する

[SC-21]

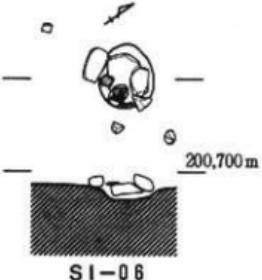
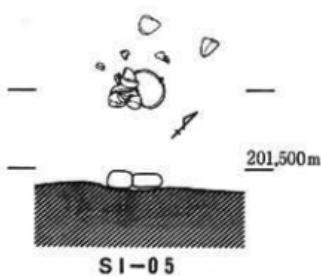
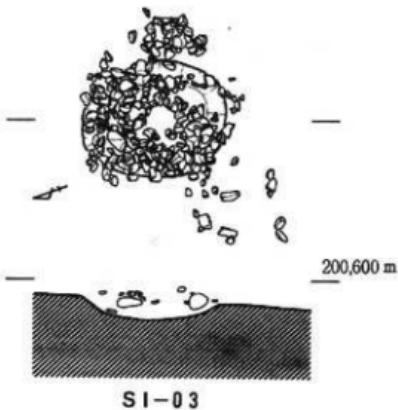
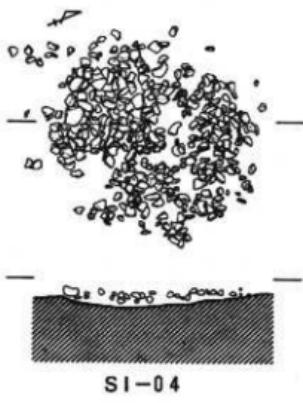
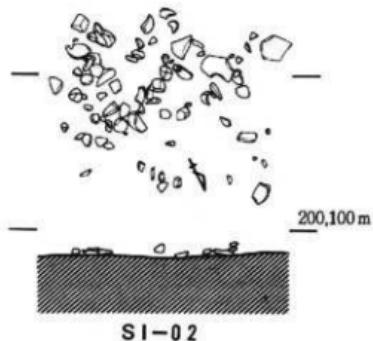
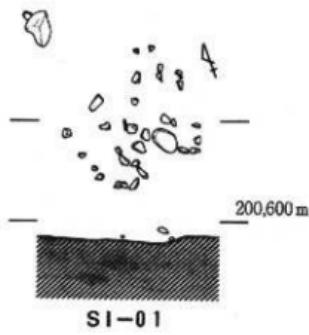
130cm×170cm、深さ95cmのやや崩れた円形を呈する

○その他の遺構

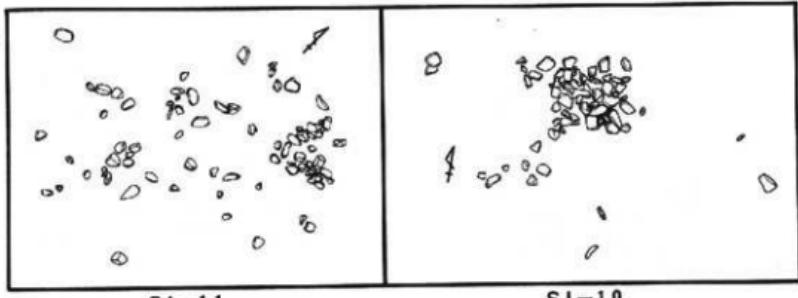
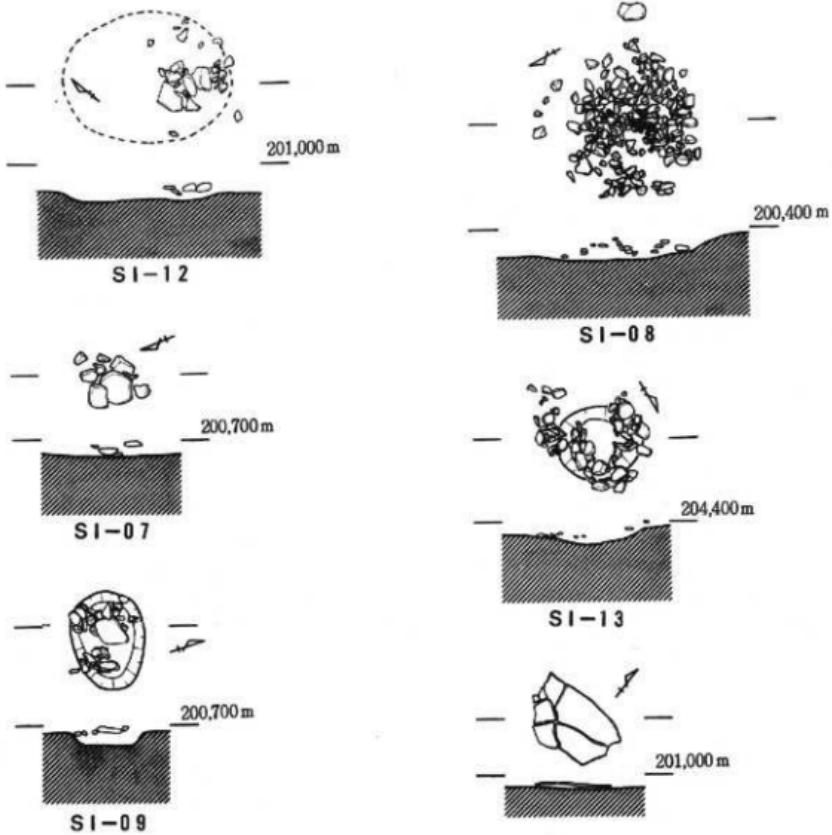
ピット状の遺構が多数検出されたがC区に限られる。遺物は出土しなかった。いずれも直径12cm前後のもので、時代やその用途は明確にできなかった。



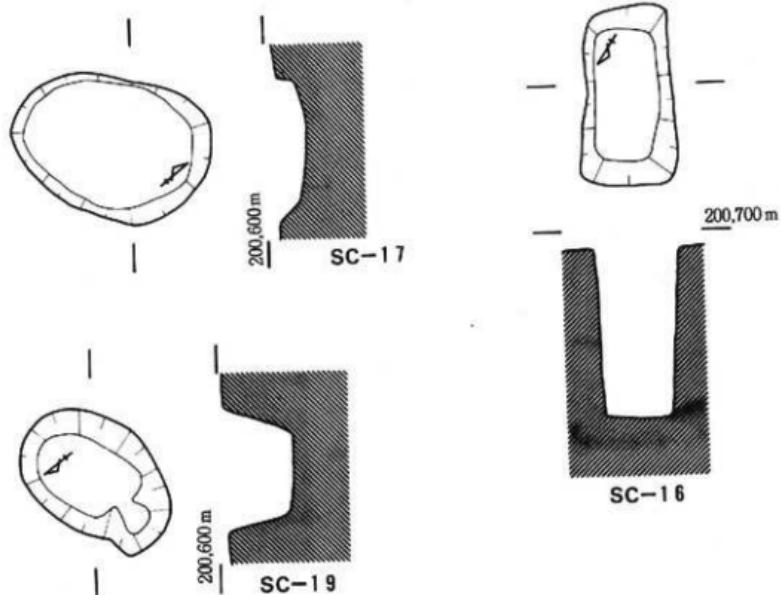
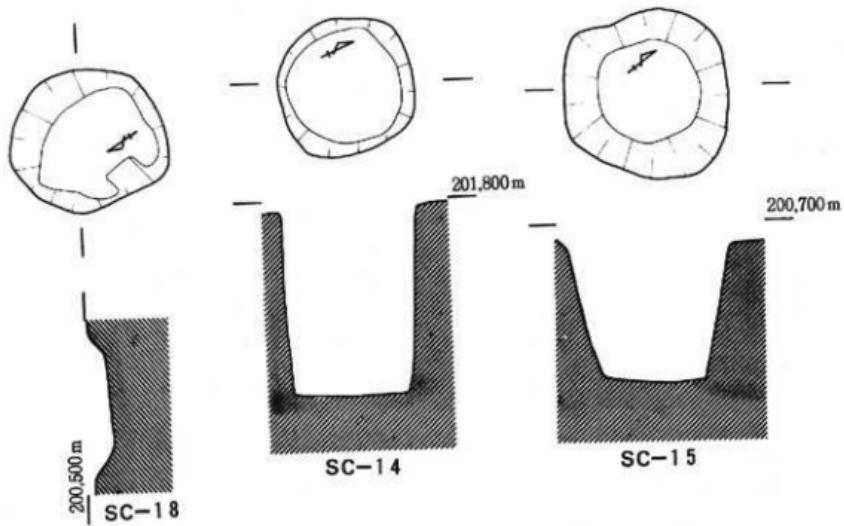
第4図 C区遺構分布図



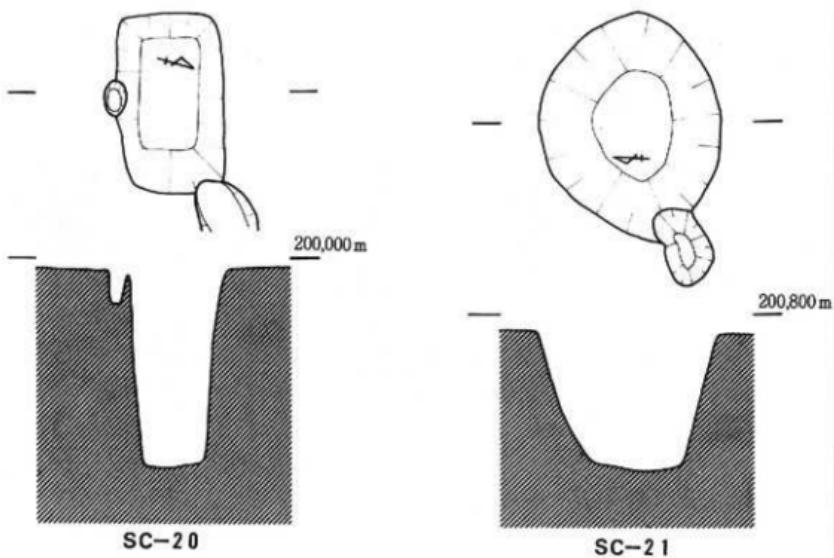
第5図 SI-01~06実測図 S=1/40



第6図 SI-07~13 実測図 S=1/40



第7図 SC-14~19実測図 S=1/40



第8図 SC-20～21実測図 S = 1/40

第3節 出土遺物

(70~88・106・107・119・134・137・155) は A 区、他は C 区の出土遺物である。

土器は前平式 (1~3) 吉田式 (7~9) 下剥峰式 (4~5) 手向山式 (10~11) 平格式 (12~69) 塞ノ神式 (70~105・107) に比定しうるもの他、無文土器 (108・110~112)などがある。

〔条痕文土器〕 (1~3)

いずれも円筒形を呈するものとみられ、全て貝殻条痕により調整される。(1・2) は口縁部直下に押圧文を連続させ、更にその下部に貝殻刺突文をめぐらす。また、口縁端部には押圧文をめぐらす。(3) は口縁部直下に貝殻刺突文をめぐらす。これらは前平式系のものと考えられる。

〔吉田式土器〕 (7・8・9)

横位と縦位の貝殻刺突線文を施すものであるが、細片であるため楔形凸帯文の有無は確認できない。

〔下剥峰式土器〕 (4~5)

(5) は貝殻刺突文を綾杉状に施し、ほぼ縦位の貝殻刺突文を組み合わせるもの。

〔手向山式土器〕 (10~11)

いずれも浅い山形押型文を施すもの。(11) は口縁端部と内外面に施文が見られる。

〔平格式土器〕 (12~69・113・114)

(14~41・43~48・50~69・113・114) は口縁部に肥厚帯を有するもので、その幅が広いものと狭いものがある。肥厚帯には刺突文、沈線文、繩文や撚糸文などが単独もしくはセットで施される。(14・16・26・27・32・48・51・56・66) は肥厚帯下部から頸部にかけて刻目突帯文または刺突文を単独もしくはセットで施文し、(41) は更に繩文を施す。(113・114) は全面に沈線文と棒状施文具による連続刺突文を施し、胴部には更に 3 条単位の刻目突帯文を縦位に施す。(62・67~69) は肥厚帯に沈線文、その下部から頸部にかけて刻目突帯文と沈線文を施すもので(62) の胴部には密な繩文と 2 条単位の撚糸文が縦位に施される。(52) は繩文のみを施す。(61) は肥厚帯が不明瞭であるが、口縁端部から頸部にかけて密な繩文を施し、更に 2 条単位の撚糸文を縦位に施す。(51) は肥厚帯以外無文である。(12・13・15・17・18) は(14・16) の胴部と見られ、繩文が密に施される。(51・52) を除いて他は口唇部に刻目または刺突文をめぐらす。

〔塞ノ神式土器〕 (70~106)

(70~88・102・105) は河口貞徳氏が分類するところの塞ノ神 A b 式で、(85~96・99~101・104・106) は A a 式とみられる。口縁部はにぶいくの字状に外反する (70・89・

90) を除いていずれも頸部で外反し、端部にかけて緩やかに内湾する。頸部にかけては刺突文と沈線文の組合せを基本とする。(79~86・102・105) は(71~77)に代表されるタイプの胸部、(88)は底部と見られ、撲糸文による文様帶と無文帶を沈線により画する。(87)は文様帶に縄文を施す。(92~95)は撲糸文を(100・101・104)は縄文を縦位に施し、いずれもその上から横位の沈線文をめぐらすが、無文帶とを画する沈線は無い。(106)はその底部とみられる。格ノ原式にそうとうする。

〔石 鐵〕(116~147)

黒曜石製が5点(118・127・142・143・145)姫島産黒曜石製が3点(116・125・134)チャート製が12点(117・119・120・122・126・132・136・140・141・144・147・148)頁岩類製が11点(121・124・129~131・133・135・137・139・146)出土した。(146・147)は剥片鐵である。全て無茎鐵で(133~135・137・140~143)が平基、その他は凹基である。凹基無茎鐵には鉗形鐵(116~121・123・129)と基部の抉りが深いもの、浅いものがある。

〔石 錐〕(148)

チャートの剥片の両面を両側から加工しており、裏面の加工はやや粗雑である。

〔石 匙〕(149・150)

(149)は頁岩製で縦形のもので、先端を一部欠損している。片側を両面から調整加工し刃部をつくる。(150)はチャート製で横形のもので、下端部を両側から調整加工し刃部をつくるが、やや粗雑である。

〔剥片石器〕(152~154)

(152)は頁岩の剥片で、片側の中央寄りを片面から調整加工したもの。(153)は粘板岩系の剥片で、片側を両面から調整加工し刃部をつくる。(154)は硬質の砂岩で、縦長の剥片の片側を片面のみ使用痕がみられる。

〔敲 石〕(157~159)

いずれも先端部に使用痕と思われる欠損部が見られる。(157)は尾鈴山麓産酸性岩類である。

〔磨 石〕(156・160~162)

いずれも側辺の一部または数カ所に使用痕と思われる欠損部が見られる。(156・162)は熱を受けたためか赤変しており、集石造構等に転用されたものと考えられる。

〔石製品〕(155)

両面から削孔するが、貫通していない。おそらく未製品と考えられる。両面共にフラットな面をもつが断面はやや歪である。

〔用途不明鋸齒状石器〕(151)

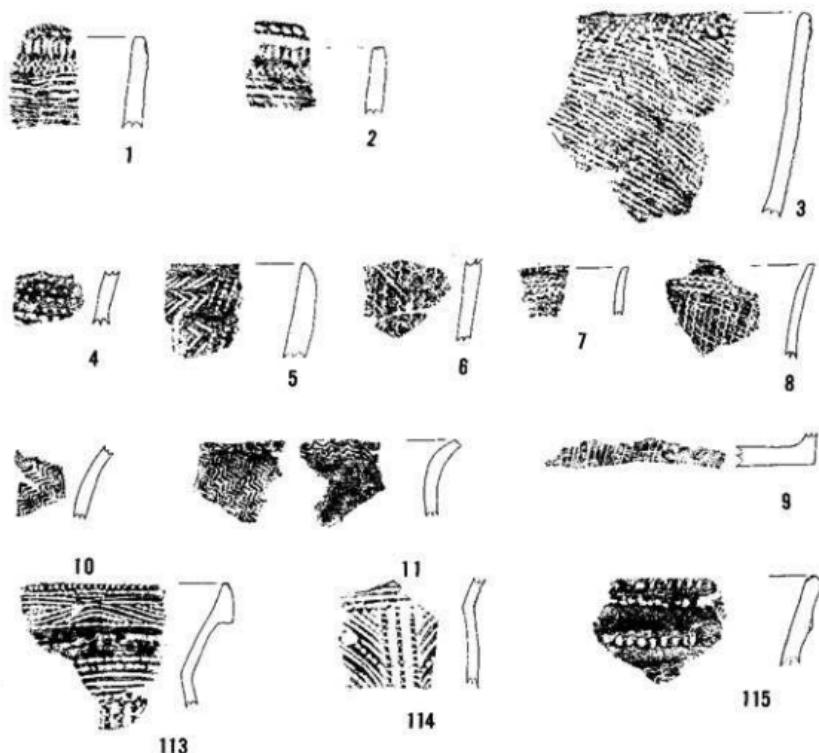
湾曲した形状を呈し、両側縁を鋸歯に状抉り調整加工する。抉り部と抉り部の間には細かな加工を施す。褐色2の下層から出土した。

〔参考文献等〕

新東晃一「早期九州貝殻文系土器様式」縄文土器大観1 1989 小学館

新東晃一「塞ノ神・平格式土器様式」縄文土器大観1 1989 小学館

『塞ノ神式土器-地名表・拓影・論考編-』縄文集成シリーズ 1985 縄文研究会



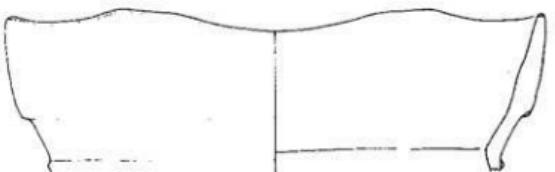
第9図 遺物実測図 S=1/3



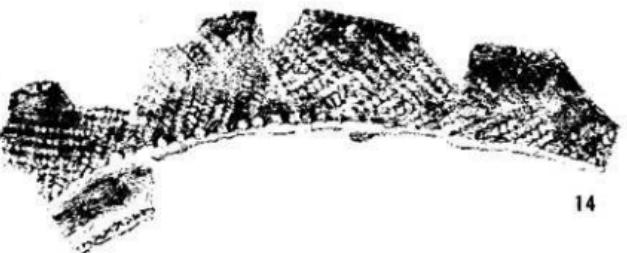
12



13



14



15



16

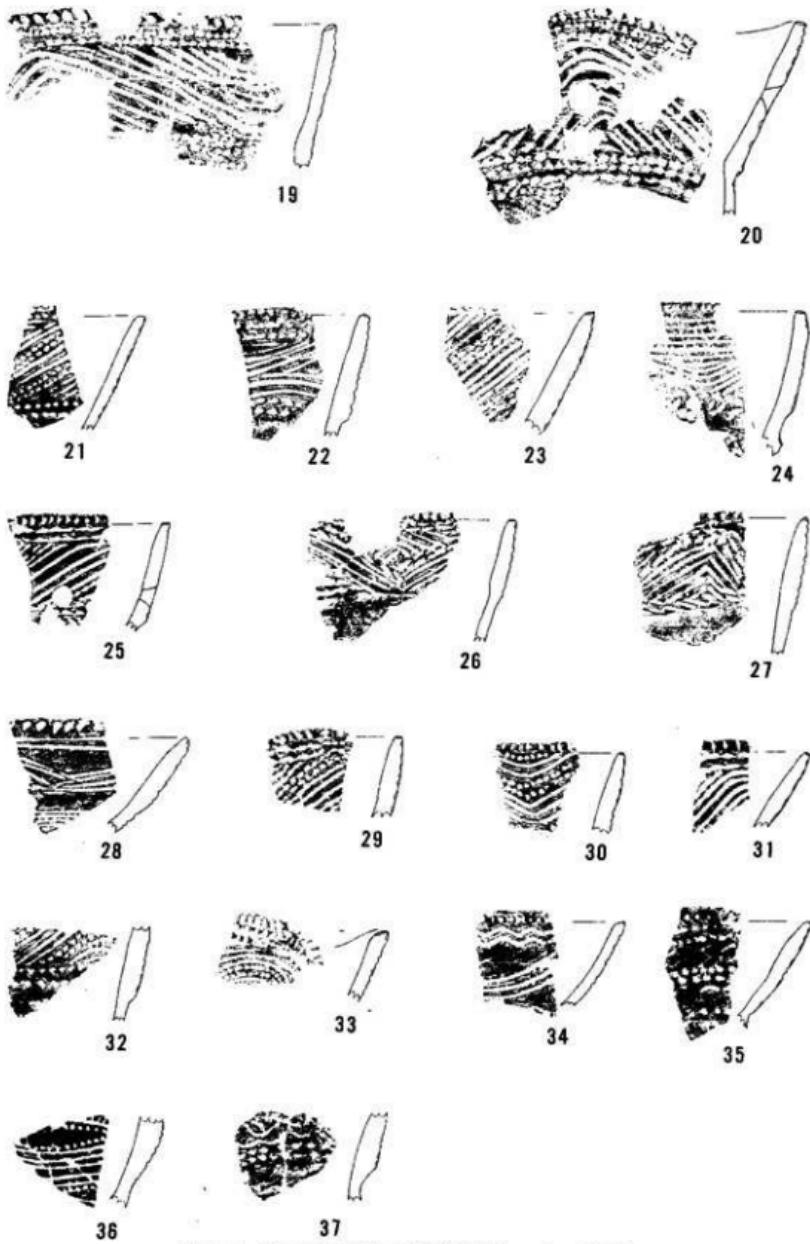


17

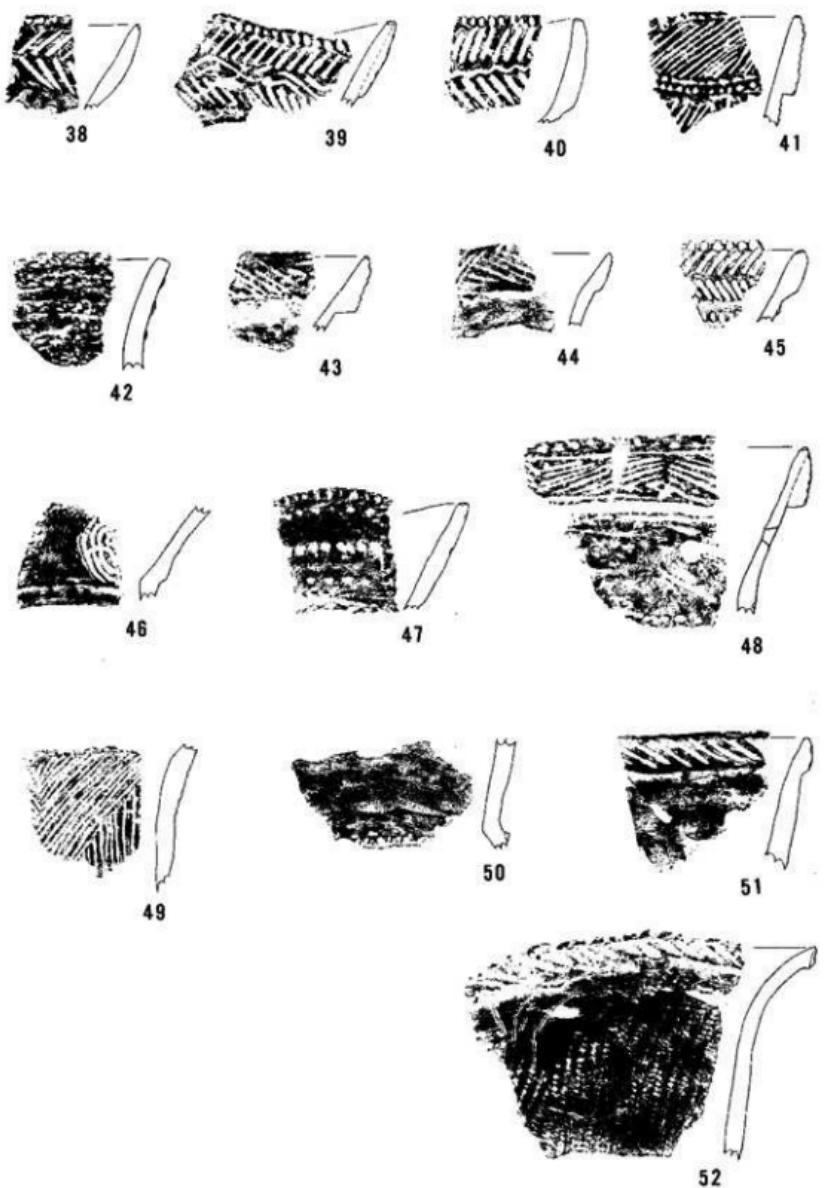


18

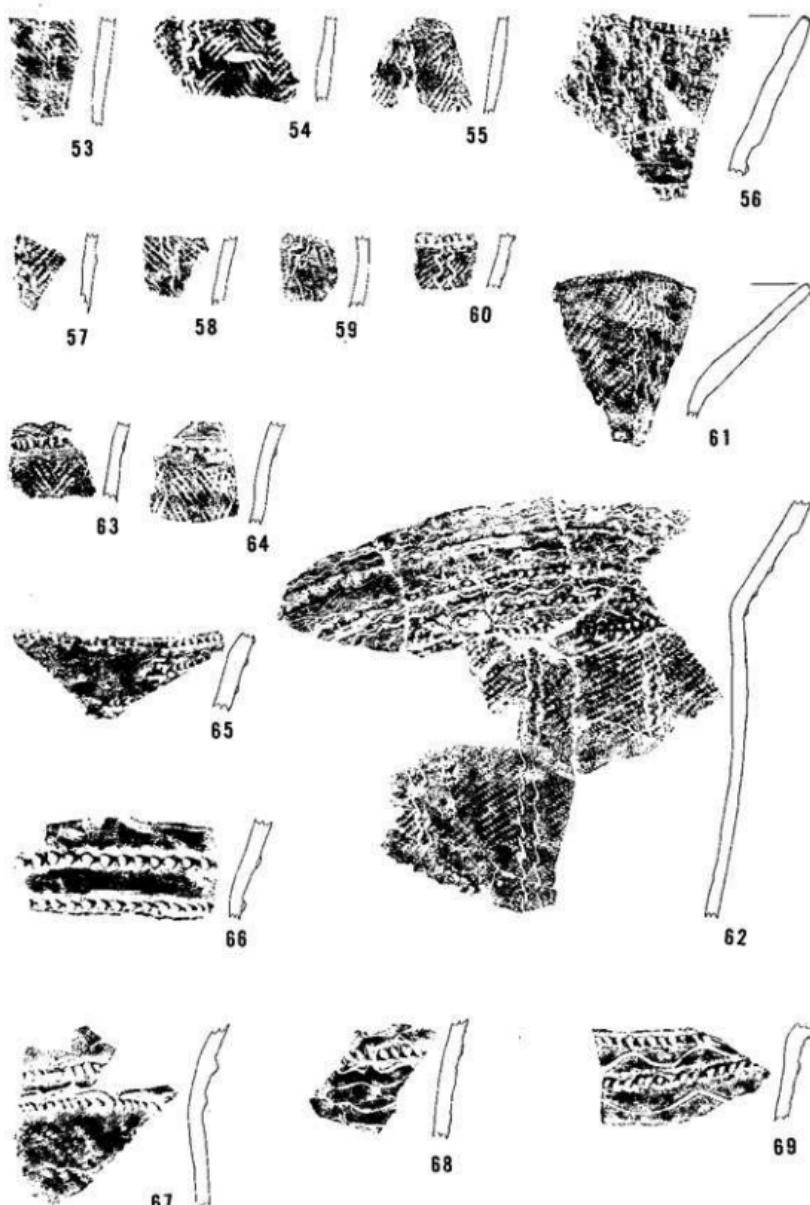
第10図 出土遺物実測図（縄文土器） S = 1 / 3



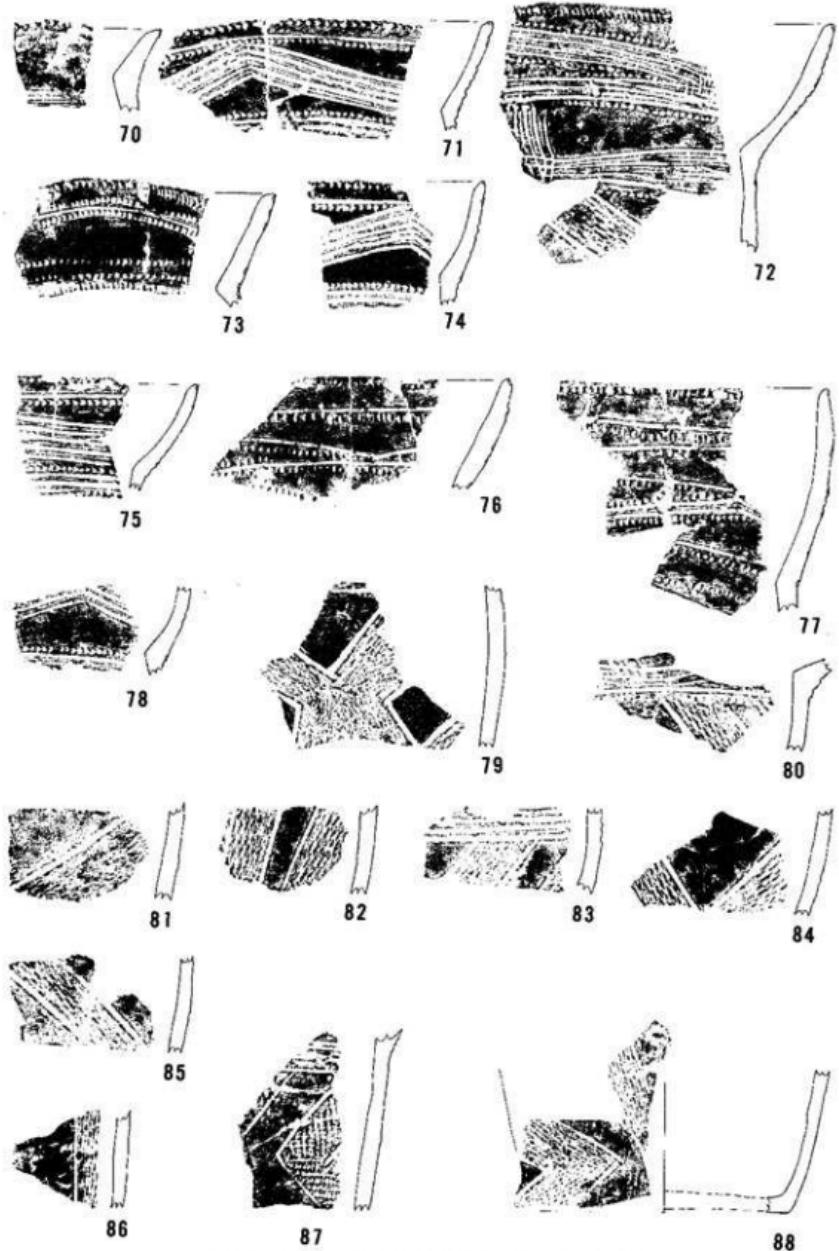
第11図 出土遺物実測図（縄文土器） S = 1/3



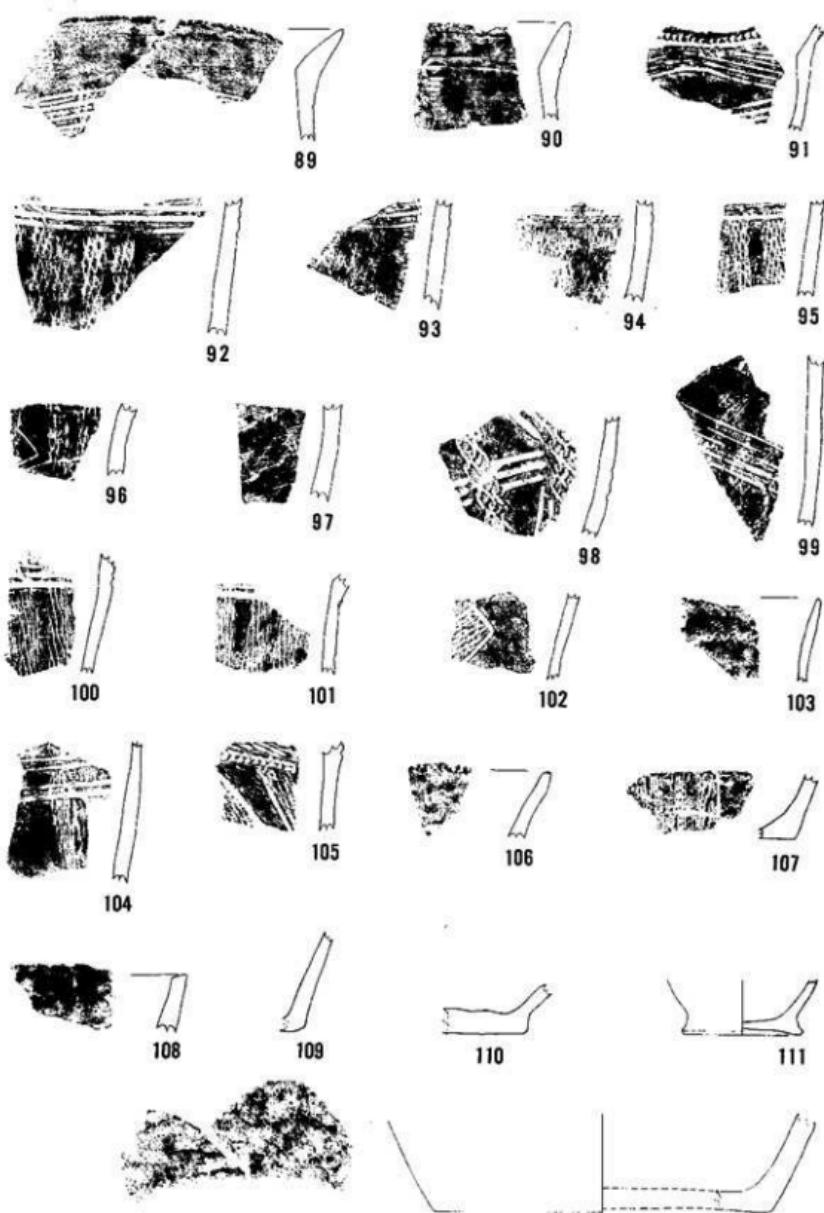
第12図 出土遺物実測図（縄文土器） S = 1 / 3



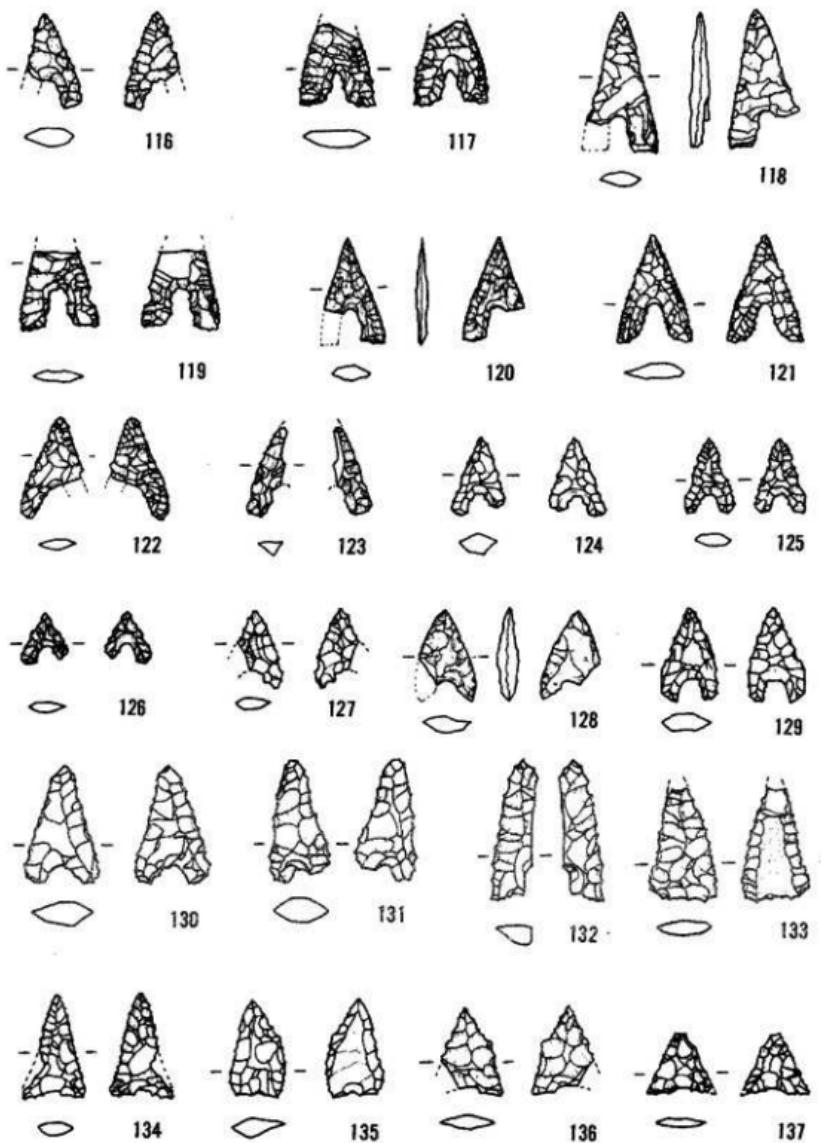
第13図 出土遺物実測図（縄文土器） S = 1 / 3



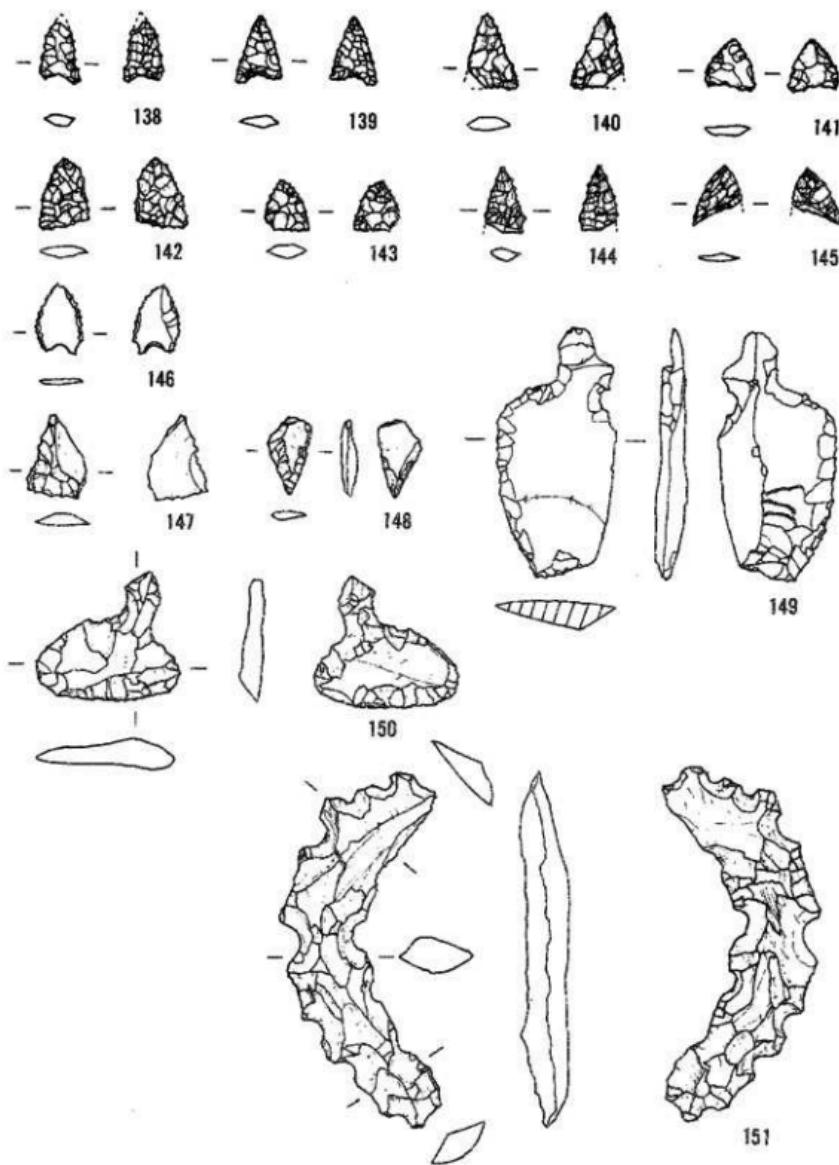
第14図 出土遺物実測図（縄文土器） S = 1 / 3



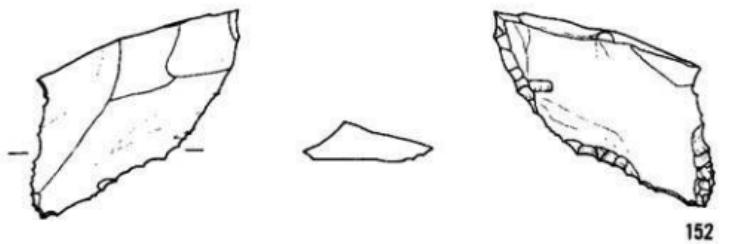
第15図 出土遺物実測図（縄文土器） S = 1 / 3



第16図 出土遺物実測図（石器） S = 2 / 3



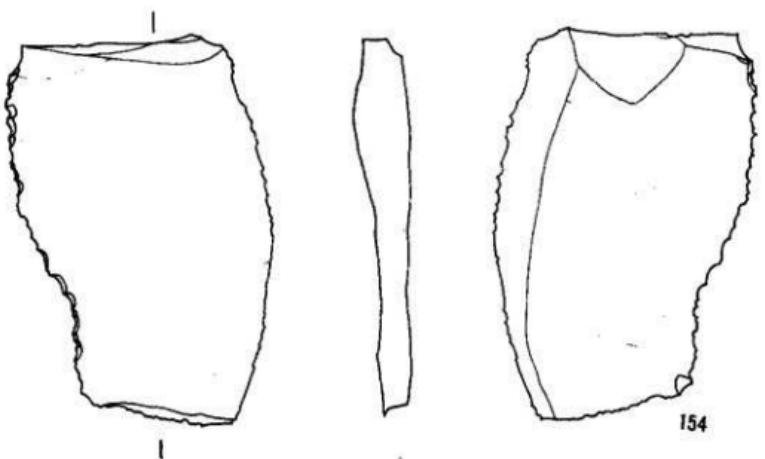
第17図 出土遺物実測図（石器） S = 2 / 3



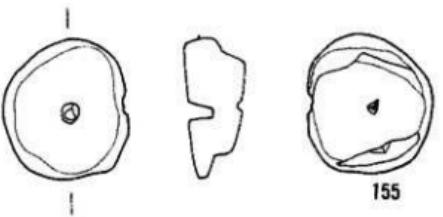
152



153

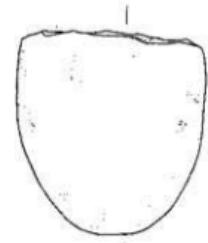


154

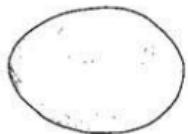
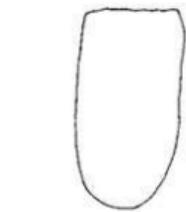


155

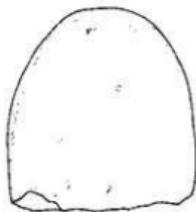
第18図 出土遺物実測図（石器） S = 2 / 3



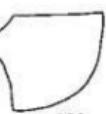
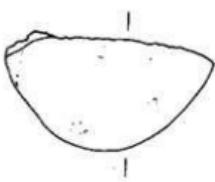
157



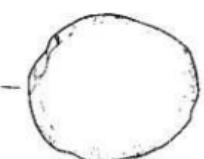
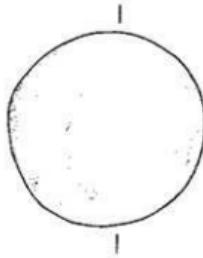
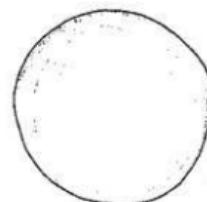
159



156



160



162



161

第19図 出土遺物実測図（石器） S = 1 / 3

第4節 まとめ

前畠第1遺跡は調査の段階で得られた資料から、縄文時代早期の遺跡であることが判明した。

出土遺物は前平式、吉田式、下剥峰式、手向山式に比定しうる土器が数点みられた他は平格式土器と河口貞徳氏が分類するところの塞ノ神A a式・A b式土器が大半であった。新東見一氏は『縄文土器大観』の中で從来は塞ノ神式土器の一群として捉えられていたものについて、南九州の貝殻文系円筒土器を源流とする塞ノ神式土器様式と、手向山式土器の凹線文が発達して縄文・撫糸文と融合してきた平格式土器様式とに分離し、これらが並行して存在する2系統論を提唱した。本遺跡においてはC区で平格式土器が大半を占め、塞ノ神A a・A b式は少量、A区はこれに対して平格式土器がみられず、塞ノ神A b式が大部分を占め、A a式は1点のみであった。いずれにおいても円筒形土器は伴わず、また新東氏のいう貝殻連続刺突文等を施す、いわゆる「塞ノ神式土器様式」の中の塞ノ神式土器はみられないところが本遺跡の大きな特徴としてあげられる。

各土器の出土層位と縦年を裏付ける出土状況は、本調査において確認できなかった。石器については縄文時代に見られる石鏃、石匙などが出土した中で、鋸歯状石器(151)は特記すべきものである。未だ類例を調査していないが、岩手県の貝島貝塚において酷似したものが出土地している。今後とくに、南九州における出土資料の増加に期したい。

遺構は土坑、集石遺構、ピットが検出されたが住居址として明確に認識しうるものは発見されず、各遺構の新旧関係や位置関係からの集落復元等はできなかった。C区のピット群については局所的に集中した分布状況が見られ、住居址の存在を推定することも不可能ではないが、ここでは敢えて明言せず、類例資料の増加を待って再度検討したい。

〔参考文献等〕

新東見一「早期九州貝殻文系土器様式」縄文土器大観1 1989 小学館

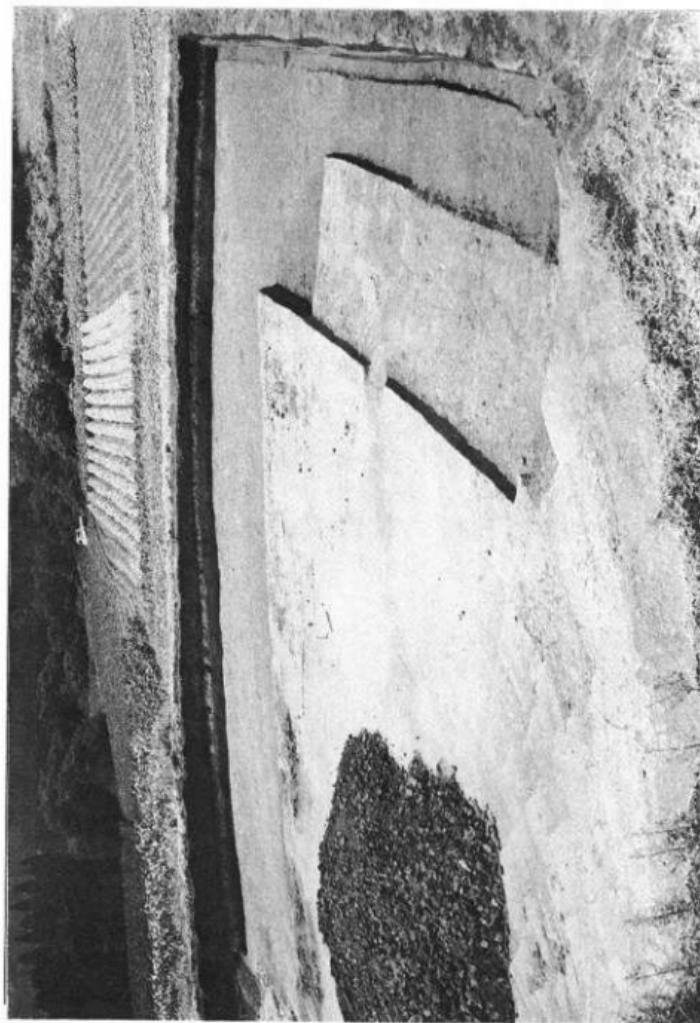
新東見一「塞ノ神・平格式土器様式」縄文土器大観1 1989 小学館

『塞ノ神式土器－地名表・拓影・論考編－』縄文集成シリーズ 1985 縄文研究会

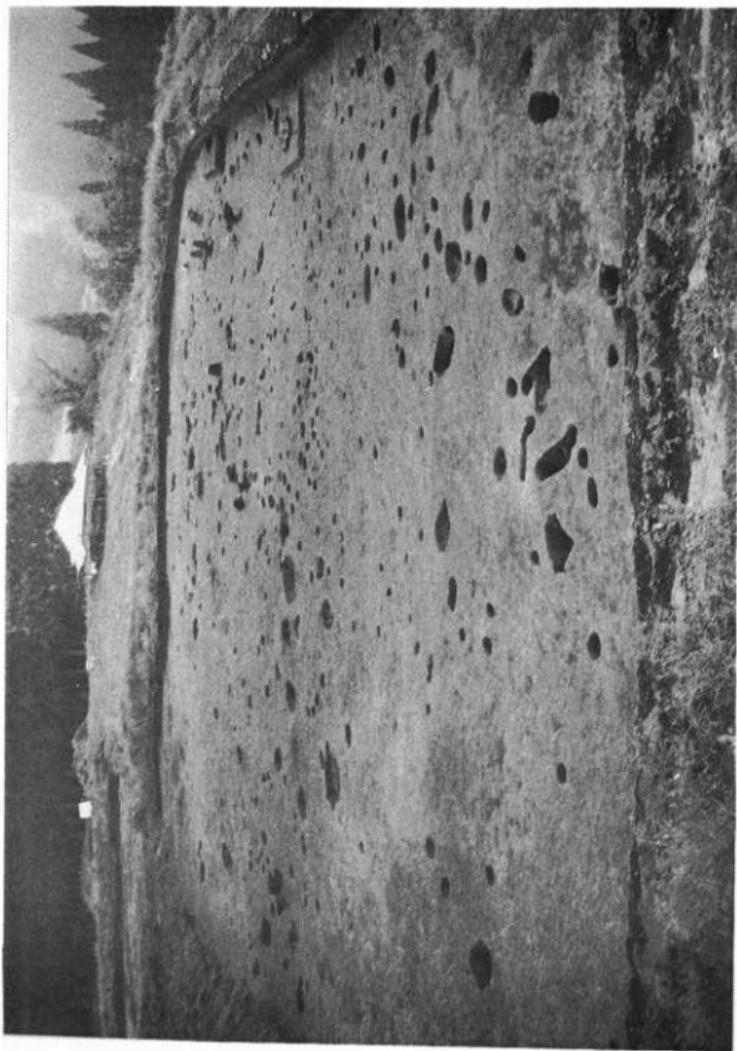
A区遺物出土状況（東から）



B区全景（北から）



C区東側全景（西から）



C区邊構築出狀況（西から）

